

早稲田大学大学院 教育学研究科
2026年度 修士課程入学試験問題の訂正内容

<特別選考制度入試 小論文>

【国語教育専攻】

【問題】 3ページ 問一 1行目

<誤> 傍線部①「やはり師匠の声が出て叱られそなるけれど」…

<正> 傍線部①「やはり師匠の声が出て叱られそうになるけれど」…

以上

二〇二六年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 特別選考制度入学試験問題
【小論文】 【国語教育専攻】

解答上の注意

- 一. 解答用紙の所定欄に、受験番号・氏名・研究指導名・指導教員名を必ず記入すること。
- 二. 無解答の解答用紙でも提出すること。
- 三. 問題用紙は「三枚」（本ページ含む）、解答用紙は「一枚」です。必ず枚数を確認すること。

以上

二〇二六年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 特別選考制度入学試験問題
【小論文】 【国語教育専攻】

問題 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

二十歳のときに『教えるということ』（大村はま 共文社）に出会った。読了後、熱くなつた心でこの人を「師匠」にすると決めた。以後、私には教えてくれる「師匠」が常にそばにいた。もちろん、架空の大村だ（実際の大村と言葉を交わした時間はトータルで五分もないと思う）。

「師匠」だからいつでも教えを乞うことができる。師匠の真似をしてもうまくいかないことだらけだった。同じことをしているはずなのに、生徒は一瞬楽しそうだが、その楽しさは持続しない。力もついていない。すると、「修行が足りん」と言われて「はいっ」と頭を下げる（もちろん架空だ）。「子どもを知る努力もせずに、子どもひとりひとりになど、十年早い！」と叱られる。「活動あつて力なし！」「子どもにやらせることを自分でやってみないで、何が学習のてびきか！」「まずは、てびかえを作ってみなさい」「こどものほんとうの言葉を引き出すのです」と手厳しい。授業のたびに叱られるのだが、それが有り難い。なんと言っても師匠の前ではいつまでも未熟者であることは当然のこと。安心して失敗できたことで今の自分がある。

授業をする上で大切にしていることがある。それは、子どもとの対話である。大げさな言い方になつてしまふかもしれないが、ほんとうの対話がしたくて私は授業をしているのだと思う。何かの意図があつて（何か期待した答えがほしくて）子どもたちに話しかけるのではない。ほんとうに聞きたいことを聞く。ほんとうに伝えたいことを伝える。そんな、私たちが日常生活で行っている普通の自然な対話がしたいのだ。

真剣に言葉を交わし、言葉になつていなかつた思いがふと口をついて出てきたり、相手の真剣な思いを受け取つて、そうかそうだつたのかとうなずいたり、話していたらますますわかんなくなつたねえと笑い合つたり。私たちの毎日は他者がいることで拓かれることが多い。自分一人では到底たどり着けないところに着いたりすることも出来る。幼い人たちだけけど、真剣に言葉を交わして拓かれることが度々ある。この子にこんな思いがあつたなんてと驚かされたり、「あのねりんちゃん、そうじゃないんだよ」と諫められて、いやはやその通り！と納得したり。そんな子どもたちとの対話は本当に楽しい。

そのような楽しい時間を創るための授業準備にも力が入る。もちろん忙しくて地に足の着かない毎日だけど、やはり楽しいことに時間をかけるのはそう苦にならない。授業で子どもたちの口が自然と開くような学習材や話題を求めて本屋に出かけたり、映画を見に行ったり、人に会いに出かけたりする。こうしなければ、こうでなければと、自分を縛つてしまうと、子どもたちの口は開きにくいような気がする。まずは自分が楽しいと思わなきゃね。なんて、呑気なことを思っていると、^①やはり師匠の声がして叱られそうになるけれど。

風越学園に来て三年が過ぎようとしている。この間大きな単元として取り組んだのは、一年目が「あれから一〇年〜東日本大震災〜」、二年目が「オキナワ〜声なき声を聴く〜」、そして三年目の今は「ミナマタ」である。それぞれの単元を行う前にそれぞれの土地に足を運び、自分の足でその場所に立つてみた。想像もつかない大きなできごとを分かつたように語ることはできない。けれど、残り少なくなつた「教室」にいられる時間の中でやれることは何だろう、やりたいことは何だろうと自分の心に聞いてみた。そして、聞こえてきたのが、これらの土地で起こつた出来事、そこで生きていた人々、これから生きていく人々のことだった。

大村は、話し合う力を育てることを大事にした人だった。戦争の時代を生き抜き、^②子どもたちには本気で話し合う言葉を、力を、つけたかった。悲願だった。そんな大村が講演会で次のようなことを熱く語ったことが忘れられない。

「一介の国語教師にできることなんかほんの小さなことです。迂遠なことです。でも、自分にやれることをしっかりとやりたいと思います」と。

その言葉はずっと自分の心の中に残り続けていた。大村ほどの力を持った教師ならともかく、自分のような者ができることなど小さすぎて、しかも国語科に直接関係のないような事柄を取り上げて何かできるのかと何度も自問した。そしてたどり着いたのが、「^③国語科にしかできない単元を」ということだった。その場所ですきた事実を全部知ることができるとも思われない。しかし、だからといって臆することはないのでないか。

二〇二六年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 特別選考制度入学試験問題

「小論文」

【国語教育専攻】

私たちが持っている想像力を頼りに、そこで起きた出来事も、そこで生きた人々のことも、本気で向き合い、寄り添い、考え、言葉にすることはできるのではないか、そう思った。

子どもたちは心が動けばすぐに行動に移せる人たちでもある。それは、公立の子ども、風越の子ども同じである。心が動いたとき、思わず口を開きたくなってそれを受け止めてくれる人がいると、言葉はどんどん生まれてくる。安心して話せる場所があれば言葉を探すことも楽しくなる。こんなふうに、大人も子どもも言葉を通して繋がっていったら嬉しい。

楽しいことが学びを開いていく。ほんとにそうだと思う。楽しくないなあと思ったら、何がいけなかったか考える。するとたいいてい、自分のせいだと気づく。楽しくなるために渾身の力で授業の準備をする。

「そうですね、師匠」と話しかけたら師匠は「うむ」と首を傾げた。

〔甲斐利恵子「子どもたちと戯れながら言葉の学びを創造する」藤森裕治編「これからの国語科教育はどうあるべきか」東洋館出版社 二〇二四年〕

問一 傍線部①「やはり師匠の声がして叱られそなるけれど」とあるが、大村はまであれば、どのようなことを指摘すると考えられるか。あなたの考えを二〇〇字程度で述べなさい。

問二 傍線部②「子どもたちには本気で話し合う言葉を、力を、つけたかった」とあるが、このような力を身に付けるためにはどのような単元あるいは学習を組織する必要があるか。あなたの考えを四〇〇字程度で述べなさい。

問三 傍線部③「国語科にしかできない単元」とはどのような単元だとあなたは考えるか。四〇〇字程度で述べなさい。

※注意※解答はすべて別紙の解答用紙に記入すること。問一・問二・問三とそれぞれ記入してから、続けて解答記入してください。解答用紙は裏面も使用可能です。

研究指導

教員名 ()

受験番号

氏名

二〇二六年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 特別選考制度入学試験 解答用紙

【小論文】

【国語教育専攻】

大学記入欄

←

裏面「続」

↑

